

選評

人間の真実

町田 康

小川尚子氏の「最後の仕事」は読んでいて気持ちのよい作品であった。実際には嫌なことも多くあるはずの人と人との関係の、その命のぎりぎりのところで発揮される自己犠牲や他を思い遣る心を白々しい美談にならない形で小説に描いて成功していた。病や老いによる衰え、そして死の悲しみと、そして時にこみあげる可笑しさがまるで救いのように描かれてあった。その場所の風景が身近に感じられる確かな筆致が物語の気持ちよさを支えていた。悦子の心情がわかるような表現がもう少しあるともっとよくなっただろう。

花田海月氏の「野良猫」は人の一生を、そのまま表したような坂の町に、七一才、四五才、二一才、十五才の女性だけの一家の物語で、語り手である十五才の桃花から見ても祖母の死についてそれそれの反応や心境、そしてそのそれぞれの変化によってそれぞれが及ぼし合う影響などを描くと同時に、時代世代の移ろいを描き、最後は命の連続ということ、そして元来、和合するべきであるのにもかかわらず、(桃花にとつては)不在であることを主たる理由として拒絶的であった、男Ⅱ牡、を受け入れることで、将来の希望を感じさせる温かな結末となっていた。仁科佐和子氏の「蟬の声」は令和悲惨小説とも申すべき、哀れを催す筋立てで、貧困母子家庭に育つ少年の目に映る此の世の景色を描いて美事であった。それは餓えと不快感、恐怖と不信、猜疑に満ちた光景で、此の世に溢れる善意はもちろぬ人間に本来、備わっている善意すらも信じられぬ絶望的な世界である。しかしそれでも生きようとすると少年の生命と蟬の命が接統されて、夏のドロドロする空気の中、静かに狂っていく母親の姿も、安易な答えや救いに拠らず人間の真実に迫って、読後、暫くの間、頭の中に蟬時雨が止まなかった。

それぞれの希望の先にあるもの

堀江 敏幸

今回の候補作には、少し先に見えている希望のかたちが、それぞれの仕方次第で丁寧に示されていました。

仁科佐和子さんの「蟬の声」。母子家庭の厳しい状況が、小学五年生の曉人の一人称で語られています。大人たちを信用できず、母の変調は「セミの抜け殻になっちゃう病氣」のせいだとする彼の言動は、とても自然に見えますが、進行中の現在を伝えながらも事後の視点をふくみもっている点で、よい意味での不安定さをもたらし、物語の内容に依存しない作者の大切な持ち味だと思っています。

花田海月さんの「野良猫」。人生を坂に喩えた舞台設定と、世代の異なる女性四人の家族の日常を、年齢の坂のいちばん下に位置している十五歳の「わたし」に担わせたことが奏効しています。少し懐かしい感じのする笑いとペーソスがあり、それが歴史に埋没した個の輪郭を浮かびあがらせます。最後に登場する火葬場の煙突からは、「ひいじい」だけでなく、失われた大切な人々を弔う、見えない煙が立ちのぼっていました。

小川尚子さんの「最後の仕事」。舅と嫁という最小単位の他人の組み合わせに、亡き息子の出生の秘密をくわえる工夫によって、家族とはなにかを考えさせてくれる作品でした。主人公は、疑似家族のやり直しを、「最後の」仕事ではなく、むしろ「これからの」仕事だと受け止めています。老いの不安も、過去の秘密も、「これから」のなかであたらしい光を放つことになるでしょう。

声の凄み

青山 七恵

「蟬の声」は、貧困と孤独のなかにあつてみずから袋小路にはまりこんでしまう少年のありようが、リアルに痛ましく描かれている。厳しい季節に少年の声なき声を塗りつぶすように響いていた蟬の声が、作中何度も姿を変えて現れ、最後には少年の声と一体化する構成も見事だった。高邁なまでの子どもなりの理を貫いて行き着いた先の施設の山奥で、降り注ぐセミの声に「声爆弾」を撃ち返す場面も忘れがたい。この全身全霊の荒々しいさまに、生きている人間の凄みを感じた。

「野良猫」の主人公一家は、産院から火葬場までが揃う坂の中腹の家に女ばかりで暮らしている。それぞれに悲しみ苦しみはあるけれど、なんとなく回復し、なんとなく前に進む女たちの、なんとなく、の力がゆるやかながら頼もしい。引き継がれる痛みとともに坂を上りはじめた少年少の主人公が、巡り巡る命の流れのなかでしっかりと地を踏みしめようとすると、その足の裏の確かなふんばりを感じられる柔らかなで強い作品だった。

「最後の仕事」では、ファミレスでだべる老年男性たちが魅力的に描かれていた。さりげないエピソードのなかに一人一人の過ぎ去った時間が感じられ、亡き妻とのなれそめについても効果的にストーリーに組み込まれている。主人公と義理の娘悦子の夫婦同然の関係性が、悦子側から想像するところかなり不自然に感じられて、終始気になってしまったものの、生きた謎が生活のどまんなかに鎮座していることも、人生の妙味なのかもしれない。